はちみつシャンプー、熱燗で

雨和七瀬

残業終わりにいつものドラッグストアに向かうと、店の入り口に人がわらわらと集まってやけに騒がしい。何事かと更に近づくと、福引抽選会が行われていた。立て看板には「特賞　ギフト券十万円分」と、夢のない内容が強調されている。下の方も見てみようと視線を下げていくと、真ん中あたりでピタ、と止まる、いや止めざるを得なかった。

（ド、「ドラストちゃん特大ぬいぐるみ」が二等！？）

この店のイメージキャラクター「ドラストちゃん」は、

① つぶらといえばつぶらな目

② 子どもも真似すれば簡単に描ける単調さ

③ でありながら有名なキャラにも通ずる非対称な描かれ方によってもたらされる親近感

これらを根拠に、大手キャラと遜色ない良デザインをしていると言えるが、ローカル展開のドラッグストアのキャラクターである、その一点でグッズなどの供給は一切無い。ファンはチラシの隅にいる姿を切り抜いて加工、もしくは自作して凌いでいる、いや、凌いでいた。

目の前には、おててを投げ出し、こちらをつぶらな目で見上げているドラストちゃんがいる。胸ポケットに忍ばせているドラストちゃんの自作アクキーをそっと握る。

（耐え抜いた日々が、報われたんだ……！）

涙を瞬きでごまかし、一つ深呼吸をする。乗車率百五十パーセントの電車で培ってきた人混み回避術を活かし、普段会うことのない主婦の皆さんの間をすり抜けて入店する。負けられない戦いは、もうここから始まるのだった。

店の中にはそこかしこに福引の案内が貼られたり吊るされたりしていた。特賞ばかり強調されていたが、一等の加湿器よりもドラストちゃんが大々的に広告されていることに口角が勝手に上がっていく。誰にも見られていないが顔が熱くなってきて、マスクをつけることで頬ごと隠す。

福引券を何枚も得るため、切れかけていたシャンプーやトイレットペーパーだけでなく、絆創膏、栄養ドリンク、サプリメントなどを買い込んでいく。

福引券が束のように、というと言い過ぎかもしれないが、どっさりと膨らんだ買い物袋と一緒に持つと文字通り重みが違う。その圧にまだ入り口を塞いでいたご婦人たちが脇に逸れていく。福引の最後尾に並び、そのときを待つ。

「次の方～……あ、お兄さんまいど！」

抽選会場に居たのは顔見知りのバイト君だ。彼はいつもの輝く笑顔で出迎えた。
「たくさんお買い上げいただいたんですね、ありがとうございます！　まだ残っているんでぜひ二等当てちゃってください！」
俺のことをよく知っている彼は慣れた手つきで福引券を数える。十回分の熱意を確認してもらって、抽選器に手をかける。

自宅の鍵を閉めた瞬間、一つを残し全ての買い物袋を放り出し、白いビニール袋を抱きしめる。
「ドラストちゃん……！」
十回分の抽選、その最後の最後に現れた、緑色の玉。その前に鐘を鳴らされた時よりも大きな声で祝福された、二等「ドラストちゃん特大ぬいぐるみ」。玄関の柔らかな明かりの下でドラストちゃんを見つめると、目の刺繍の一部にラメが入っている。あまりにも、特別だった。
「来てくれて、ありがとうっ……！」
靴を脱いで上がると、足に当たった他の景品が倒れ、ごとん、と鈍い音が鳴る。
「……あー、これどうしよう」

しゃがんでボトルを拾い上げる。限定のラベルに描かれた頭を洗うドラストちゃんの奥で、気泡きらめく液体がゆっくりと動き出す。
「買ったのにな、シャンプー」
この抽選会は罠だったかもしれない。三等は、最近話題のはちみつ成分入りシャンプーとリンスのセット。十回も引いた結果、手に持っている以外にも二セットほど持ち帰ることになってしまった。
『はちみつのいい香り～♪』……ふふ、かわいい」
シャンプーを洗面所の方に寄せ、ドラストちゃんを袋から取り出す。そして、衝動を抑えながら洗面所で顔を洗い、しっかり水気をふき取り、ダッシュで戻り、そして、ドラストちゃんに顔をうずめた。大きく大きく息を吸い、汚さないように顔を離して息をそっと吐く。その次におててをにぎにぎし、あんよをひょこひょこさせ、ぽんぽんをさわさわする。大店舗の店頭にだけ置いてあるドラストちゃん像以来の立体造形。しかも好きに触っていいなんて。
ああ、これが水を得た魚、いや、目薬を得たドライアイ……！（リモートワークが推奨されていた時期のドラストちゃんのひとことより抜粋）

しばらく堪能していたが風呂を沸かしていないことを思い出し、せめてシャワーを浴びようと思い立った。ドラストちゃんをそっとベッドに置き、風呂場に向かった。
服を脱ぐとあまりにも寒く、風呂の戸を開ける頃には鳥肌が全身に立っていた。急いでシャワーを流し始め、軽く髪をネットまで追いやる。湯気が見え始めたあたりで頭からシャワーを浴びる。
さてまずは髪から、とシャンプーのポンプを一回押すと、スコッと虚しい音がした。
「あ」
詰め替えを買ってきたのに、玄関に置いてある。
（どうする……）
シャワーを止め、ずぶ濡れの状態で戸を開く。すると目の前にはちみつシャンプーの入った袋が置かれていた。手を伸ばせば、ギリギリ手が届いた。せっかくなら試してみよう、とシャンプーを手に取り、戸を閉めた。
容器が違えば本物の蜂蜜と間違えてしまいそうな液体を、ポンプひと押しして出す。さっきまで外気温よりも寒いかもしれない場所に置いてあったそれは、滑らかながら棘のように突き刺さる冷たさだった。
こんなもん頭に乗せたら死んでしまう。咄嗟に蛇口を捻り、手も入れられない熱湯を洗面器いっぱいに張る。そしてシャンプーの容器を洗面器に入れた。

光景に若干見覚えがある。去年行った温泉で湯に浸かりながら飲んだ熱燗のそれだ。少し待ってから取り出すと、容器からもうホカホカしていた。
改めて、一プッシュ。するとシャンプーは粘性を失っており、左手に勢いよく激熱のはちみつフレーバーが飛んできた。
「ッッ熱ゥッ！！」
思わず手を引っ込め、ブンブンと振り払った。粘性が無いのだからすぐに手を離れ、冷めていった。そして宙を舞ったシャンプーは歯を食いしばっていた口元に飛び込んできた。
「うえっ……ん？」
驚いた拍子に舌に当たってしまったシャンプーは、香り通りの自然な甘さをしていた。小さい頃、休みの日に家族で作ったパンケーキ、蜂蜜をかけすぎて手も口元もべたべたにしながら食べて笑われたのを思い出す。いや、あるいはそれよりも味が洗練されているかもしれない。
『はちみつのいい香り～♪』
ラベルのドラストちゃんの笑顔を眺める。
世の中には、推しの使っているシャンプーを飲む文化があるらしい。汚らわしいと卑下していたが、今なら、このシャンプーなら、もしかしたら。
思いついた瞬間から、心臓の拍動が激しくなっていく。風呂場を飛び出し、キッチンからメラミンコップを持っ

て戻る。そして一プッシュ分をコップに取り、恐る恐る、重力に任せて口に流し入れる。

あっ

コップ八分目まで入れたシャンプーを摂取し終えたとき、我に返った。ボトルを見ると三割ほど減っている。

（これ、全部……）

鳥肌が再び立ち、大人しく手に取って頭に乗せる。当初の想定通り、温かいシャンプーは頭のあらゆる巡りを良くしてくれていそうな優しさがあった。そうやって回り始めた頭で、口に入れられる物を髪や頭皮に塗りたくっていることを考えてしまい、眉間にしわが寄る。さっさと流したくなり、頭皮を揉む手は早くなっていく。

頭全体が泡で覆いつくされ、眉の上にまで垂れてくる。シャワーを掴んだことを確認して、目を閉じて蛇口を捻った。

シャンプーを流し終えた頃に改めて髪を触ると、今までとまとまり方が明確に違う。絡まりもなく、飛び出すこともなく、皮脂などの汚れを全て洗い流した実感を得られる。これが話題になるシャンプーの実力か、と感心した。

この感心は風呂場を出た後も続いた。ドラストちゃんに見守られながらドライヤーで髪を乾かしていくと手櫛での感触が、まるで人違いをしてしまったかのようにサラサラとしていた。女性の髪ってこんな感じかな……と中学生のような事を考えてしまい、煩悩をブンブンと振り払った。

眠りにつく準備を終え、ドラストちゃんを抱えてベッドに倒れ込む。なんだかはちみつの香りがするのは、俺の髪がその香りだからだろう。

（追記：諸事情によりどこかから抜けてしまった文章を次のページに記載します。あえてこのまま、お楽しみください）

　これがドラストちゃんのシャンプーの味……！　なんて甘く絡みついてくるんだ、これはもはや愛、そう、愛を物質化したらこのシャンプーに辿り着くんだ！　浴びたい、いや一滴も無駄にしたくない、一体化したい！　もう一杯口に含もう……ああ、体が熱い、喉が、胃が、胸が、脳神経が、海綿体が叫んでいる！　ドラストちゃんの愛、いやドラストちゃんこそ愛、つまり今ドラストちゃんをこの身にて受け止めている！　高鳴る、怒張する、列状に限りなく近い純情を以てして、愛のシャンプーを流し込んで喉を焼き、握りしめる。興奮が俺を突き動かす、これはもはや人類が無限に繰り返す儀式、それを高次に昇華させた現象、いや、祭典！　ここには俺とドラストちゃんだけが居る。これは秘されるべき事象でありながら誰もが清廉な仮面の裏で執り行う欲の発散行為とは違うようでいて同じ、そして違う。ああ、心地いい。握りしめていた手の動きが早まる、そして異常なまでに鼓動が早くなっていくのを、またコップを傾けつつ鼻で肺の中の空気を入れ替えることで鎮めようとするが、抑えきれない！　……ああ、放ってしまったものはしょうがない。シャンプーを飲むという行為が、こんなにも新しい世界を見せてくれるとは思わなかった。それでいてなぜだろう、まだ俺は愚者のままだ。なら、まだ許される。シャンプーのボトル、ポンプを取り外し、コップ一杯分を注いでいく。煮えたぎったように熱く、湯気が立ち上がる。気泡が中央の方に残っていて、その屈折がまるで融けたガラスのようである。美しい……当然だ、ドラストちゃんの愛であり、俺の愛であるのだから。そっと唇を近づける。熱い、これを一気に流し込んでしまえば消化器官は愛に焼かれて機能しなくなるだろう。それでも構わない。構わないが、ほんの数滴分だけを流し入れる。それだけで舌がひりついていくのがよく分かる。しかし感じるのは苦痛ではなく高揚、悦楽、一体感。わかっている、ハイになっている。でも止まらない。自分が自分である必要をほんの数分前に置いてきてしまった。また海綿体を握りしめる。シャンプーを飲み込む。甘さに、熱に、快感に、自分の境界線が溶けていく。溶けた自己が行き着くのは当然、ドラストちゃんだ。今俺はシャンプーを介してドラストちゃんと完全に一つになった。そうしてもう一度、コップの中身の愛を全て取り込んだのと同時に、荒れ狂う欲を撒き散らす。二回目ともなると一気に倦怠感が体を支配し、力なく小さな椅子に座り込む。動かし続けていた手が震える。しかしそれはまたシャンプーのボトルに伸びていた。シャンプーという愛がそこにある限り、受け止めるのが愛する者の定めであり権利である。注ぐ、飲む、注ぐ、飲む。段々とシャンプーの本質の味も感じ取れるようになってきた。やはり愛のように、どこかに苦さも内包しているのだ。まるで許容できないものは拒絶しろ、と言わんばかりに……。